京ものがたり

加藤周一の「隠れ家」白沙村荘

知の巨人 ごきげんな誕生会

加藤周一　1919年、東京生まれ。東京帝国大医学部卒。評論・創作活動に転じ、古今東西にわたる幅広い教養と感性で「日本文学史序説」「雑種文化論」などを発表。リベラルな立場から平和問題などに積極的に発言を続けた。2004年設立の「九条の会」呼びかけ人。08年12月、89歳で死去。

橋本関雪が大作を描いた大画室「存古楼」。周囲の庭園とともに、加藤周一さんのお気に入りだった＝京都市左京区、楠本涼撮影

ぎょろりと眼光鋭く、とっつきにくい印象を抱かれがちだった、評論家・加藤周一。その「知の巨人」がふと、心を休めることができた場所が、京都だった。

中でもお気に入りは、銀閣寺近くの白沙村荘。日本画家・橋本関雪（1883～1945）の旧宅で、約1万平方㍍の敷地に、関雪自ら設計した庭園やアトリエ、茶室などが配置されている。

◆

きっかけは誕生会だった。1989年9月、立命館大客員教授として毎月東京から京都に通っていた加藤の70歳の誕生日をここで20人ほどの友人らが祝った。加藤の気さくさと膨大な知識量に、メンバーは「一度では惜しい」と継続的な勉強会を企画した。

会の名前は、白沙村荘にちなみ「白沙会」。90年4月から、高校生、主婦、年金生活者、豆腐屋の主人ら年齢も肩書もまちまちな人々が京都の居酒屋で、その日の朝日新聞を教材に、加藤を囲んだ。東西ドイツの統一、憲法第9条からヤクザ映画まで話題は多彩だった。加藤は好物のおでんや冷ややっこを肴にビールを傾けながら、いつも楽しそうに話した。

あるとき、メンバーから「憲法第9条をなぜ守らなければならないか」と質問が出た。

加藤は「国際的な紛争を軍事力で解決しないことは、時代の先取りだから守ったほうがいい」と述べた後、「日本の国として国際的に通用するものが他にない。日本が国際社会で特に意味があるという『個性』は、第9条にかかっている」と明快な言葉で答えた。

2001年まで約60回続いたその記録は、「居酒屋の加藤周一」という本になり、5万冊以上売れた。編集を担当した、かもがわ出版取締役、湯浅俊彦(77)は「『私の本の中で最も意外性のある独創的で魅力的な題名を付けた』と加藤さんは喜びました」。

加藤はその後も白沙村荘の庭園や静けさを愛し、「隠れ家」と呼んだ。庭や建物を見つめ、関雪がどんな思いで設計したか考えていたようだったという。

◆

80歳、84歳の誕生会もそこで開かれた。加藤は「ここにはリベラルな雰囲気がある」と賛辞を送った。

赤ワインを好み、酔うと、自ら詩を書いた歌曲「さくら横ちょう」を口ずさんだ。

〈春の宵　さくらが咲くと／花ばかり　さくら横ちょう／想い出す恋の昨日／君は　もうここにいないと

この歌が出ると、橋本妙館長(71)は「今日はごきげんやな」とわかったという。

白沙村荘一帯は桜の名所でもある。もうすぐ、春が訪れる。

＝敬称略（大村治郎）

おこしやす

白沙村荘（京都市左京区浄土寺石橋町37、☎075・751・0446）は日本画家・橋本関雪が絵画の制作をするために造営した邸宅。約7400平方㍍の池泉回遊式庭園（国の名勝）には平安時代から鎌倉時代の石像美術品が置かれている。大作を描いた大画室「存古楼」などの建物とともに、関雪の美意識を反映している。

2014年9月、白沙村荘の造営開始100年を記念し「橋本関雪記念館MUSEUM」が開館。関雪の作品を展示しているほか、庭園や東山を望む展望テラスもある。入館料は通常時が千円、特別展開催時が1300円。敷地内には洋風レストラン「NOANOA」、京料理とおばんざいの「お食事どころ　はしもと」もある。

ぷれぜんと

羊銅いの仙人を描いた白沙村荘の干支色紙（橋本関雪筆）を5人に。はがきに住所・氏名・年齢・電話番号を記し、〒530・8062　大阪北郵便局私書箱526号「加藤周一」係へ。23日必着。